IB DIPLOMA PROGRAMME
PROGRAMME DU DIPLÔME DU BI
PROGRAMA DEL DIPLOMA DEL BI

N07/1/A1JAP/HP1/JPN/TZ0/XX

88070149

JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 20 November 2007 (afternoon)
Mardi 20 novembre 2007 (après-midi)
Martes 20 de noviembre de 2007 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

© IBO 2007

次の１（ａ）の文章と１（ｂ）の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

１（ａ）

襖を開けると、となりの茶の間から冷気が吹き込んできて、さとは身震いをした。どこから差し込んでくるのか、茶の間は閃かな光に溢れ、畳の縁までが見える。向かいにたきの部屋があり、さとは静かに襖を開けた。

その途端に重く湿った夜気に体を包まれ、白い光に目が眩んだ。暁の光と思っていたのは雪明りで、目を凝らすとたきが雨戸を開けた縁側に座っていたのである。外は雪が積もり、舞い込んでくる雪がたきの頭や縁側にも薄く積もっていた。

（どうしよう……）

さとは息をひそめて眺めたが、ややあってまた静かに襖を閉めた。このまま放っておけば凍え死ぬだろう、たまさか目覚めなければ知らずに済んだことではないか。

茶の間に座り込んでからどれほどの時が過ぎただろうか、再び襖を開けると、たきはまるで残像のように、縁側に変わらぬ姿勢で座っていた。安らかな気持ちで雪を眺めているようにも、すでに凍え付いているようにも見えた。

さとはじっと見つめていたが、不意に胸が激しく波立ち、たまりかねて歩み寄った。

（お、お許しください……）

あわてて綿入れを脱ぎ、たきの背へ掛けてやると、さとは夢中でたきの体を摩った。すると間もなく、たきが静かに振り向いて言った。

「どなたさまか存じませんが、ご親切にどうも……」

そういって微笑みかけた顔が、驚くほど優しく、まるで花の綻ぶようだった。

「いいえ」

とさとは震える声で言った。

「親切だなんて……」

はじめて見るたきの笑顔に、驚きを通り越して、さとはしばらく放心していたようである。

やがて目覚めると、何もかもが報われた気がする一方で、何という恐ろしいことを考えていたのだろうかと思った。優しい言葉をかけるでもなく、惚けることの悲しみも分からず、くるしめてきたのは自分のほうではなかったか。そう思い当たったときには、不思議とさとの心から憎しみは消えていた。

「雪が、お好きなのですか」

さとは去年の冬もそうしていたきを思い出して言った。

「ええ、とても……」

とたきはまた静かに笑った。

「でも市村へ嫁いでからというもの、落ち着いて眺めたことは、ただの一度もありませんでしたよ」

「そうでしょうね…… そのようなゆとりはなかったでしょうね」

さとは立ち上がると、たきの綿入れを取って戻り、膝にもかけてやった。たきは降りしきる雪を眺めて、飽きることを知らぬようすだった。雪はときおり座敷のおくにまで吹き込んできたが、畳へ落ちるより早くどこかへ消えてしまう一方で、たきの凍え切った体にだけはみるみる積もりはじめていた。

（ご親切にどうも……）

白髪に凍り付いた雪を丁寧に除いてやりながら、さとはたきの最後の一念を見たような気がした。幻のように閃かに光る雪明りの向こうに、たきは自分の辿ってきた暗い道を見ていたのかも知れない。惚けなければ素直に礼も言えぬほど、家に縛られ、辛い思いをしてきたのだろう。だとしたら、せめて辛かった分だけ、老いて惚けて何が悪いだろうか。

（おかあさまは……）

きっと、わたくしが同じ道を辿らぬようにと念じて、救ってくださったに違いない。そう思ったとき、さとはようやく姑と心が通じたような気がして、深い溜息をついた。

（乙川雄三郎「花の顔」二〇〇一年）

注　さと　　十八歳で二十五石の市村家に嫁いだ。
　　綿入れ　　裏をつけて中に綿を入れた防寒用の衣服。

N07/1/A1JAP/HP1/JPN/TZ0/XX

1（b）

雨とわたしと手のひらの魚（さかな）

ながた　ゆきこ

天井から床まで一面のガラスの壁
細かい雨は斜めに降りかかり
てててん　てててん
リズムを描く

ぶあついガラスは風を否定し
雨につれない
聞こえない　見えるだけのリズム
てててん　てててん

わたしの厚い手を
ガラスに押しあてると
手のひらの形そのままに白く曇る
そうやって外の冷たさを少しだけ受け取ると
手のひらの魚が
わたしをすり抜けて泳ぎだす
てててん　てててん
雨のリズムをかいくぐり
ひらひらと灰色の建物の間をゆく

雨は雨は
わたしはわたし
そして　手のひらの魚はさかな
同調なんかしない
はずなのに
てててん　てててん
一日中　雨は降り
一日中　雨のことを考えて
てててん　てててん

リズムを　網膜に焼きつけても
手のひらの魚は　ひらひら
街路樹のてんぺんをのけじらせ
デパートの真紅の旗の先を引きちぎって
いったきり
戻ってこない

てててん　てててん
降る雨は　心を内と外をひっくり返す
世界はガラスの壁の内側で
日々を切り刻むメトロノームになり
てててん　てててん
手のひらの魚だけが
わたしの内側に行ってしまった
冷たい雨に濡れながら
熱をもてあまし
理性の果てを確かめようとするように
ぶざまな泳ぎで

雨は
わたしは
待っている
てててん　てててん
何を待っているのか
雨は降り続き
雨は繰り返す
わたしはなくした手のひらの指の先で
雨のしずくをたどってみたい
隔てられて
遠い
その雨に触れたい

（ながた　ゆきこ「雨とわたしと手のひらの魚（さかな）」二〇〇六年）